

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

最初の牛

北海道の牛の記録で最も古いものは、貞享元（一六八四）年。白い牛が一頭、渡島の白神岬に泳ぎ着いたという。なんのために泳いできたのか知る由もない。

それから百年ほど経った寛政の頃、最上徳内が「松前に牛馬あること」として牛のことを「函館最寄りの銭亀沢に少しある」と書き残している。

寛政十一（一七九九）年には函館奉行が南部から牛を四頭買って来て、千歳・勇払間に石狩のサケを運ばせたという。

いまでは牛といえば牛乳を搾るか、食用にする動物であるが、昔の日本人は、そのようなことをすると穢れると考えていた。牛はあくまで車を牽いたり荷物を運んだりするための動物であった。いわゆるベコである。

ベコの危機

そんなベコも、安政二（一八五五）年に函館が開港され外国船が入港するようになつてからは、のんびりとただ荷物を運ぶだけというわけにはいなくなつてきた。この頃箱館近在に民有の牛が約百八十頭いたという。外国船の連中がその牛を見つて「食べさせろ」と言い出したのだ。函館奉行は、「飼育している牛馬は人助けをしてくれるのだから、食べたりはしない」と言つて代わりに要求を撥ねつけた。

乗員たち。「牛肉は病人養生のための薬だ。薬である牛を食べさせないといふことがあるか」と迫った。

初の牛牧場

牛が薬と言われて奉行所も参つてしまった。結局、幕府は安政三（一八五六）年牛の牧場を設け、その要望に応ずることにした。

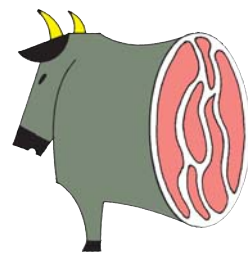
何はさておき必要なのは牛である。翌年、南部藩に雌雄五十頭の牛の買入を依頼したが南部藩民は牛を外国人に

である。

かさむ経費

しかし、せっかく軍川の牧場に牛を入れたのに、何と外国人が口にするより先に熊が食べてしまつたという情けない始末。熊の被害が多かつたため経営がうまくい

かなかつたのか、後に規模を縮小して峠下の



ベコから牛へ

肉牛事始

深い味わいや本当の面白さを「醍醐味」というが、「醍醐」とは古代最高級の乳製品のこと。しかし奈良時代、仏教の普及とともに肉食を禁じる風習が広まり乳製品を口にする習慣は次第に失われていった。だが幕末の函館でどうしても食べる牛が必要なる事態が生じた。その理由とは……。

ほづに移転している。

牛の値段も高かつた。一頭二十五ドル。当時長崎では三ドルで牛が買えた

ので、アメリカ領事館から「土地の広い蝦夷で飼つた牛がそんなに高いはずはない。もっと安くして欲しい」と幕府に抗議をしている。当時の記録を見ると、一頭飼育するのに八両三分もかかつており、高く売らなければ間に合

わなかつたのも事実であった。飼育した牛は函館で肉商を営むアメリカ人に売り渡したという。

ライスなのに牛乳

北海道で最初に牛乳が搾られたのもこの頃だ。安政四（一八五五）年、捕鯨船に乗ってアメリカの貿易事務官ライスは函館にやつて来た。ライスは淨玄寺という寺に起居していたが、奉行所に出願し、牛一頭を牧場から借りて来て、寺の庭で搾乳を始めた。これが北海道の牛乳の搾り初めであった。

初の牛乳販売

ライスは搾乳してからおよそ十年後の慶応年間、肝付七之丞が雇い人に牛乳を搾らせ、その牛乳を四合壺一本一分で売つたという。飲んだのは居留外国人の医者から薬だから飲めとすすめられた病人だった。当時牛乳も薬とみられていたのだ。一分は、今のお金にすると二・三万円。かなり高価なものだった。その牛乳もホルスタインではなく南部牛から少しづつ搾り集めたもの。いったいどんな味がしたのだろう。

その後

乳牛が北海道に入つて来たのは明治十一（一八七八）年。札幌農学校の教頭だったブルックスがアメリカに帰つたクラークに頼んで送つてもらつたエアジアという赤白班の美しい牛であった。

乳牛を代表するホルスタインが初めて北海道に登場するのは、さらに十二年後の明治二十三（一八九〇）年のことであった。



ひだのかな代さん

とにかく体験

した。最後は花屋で五年勤めました。

転機は四十歳

保育科の卒業絵本を一冊創らなければいけないんですが、それを褒められてしまっ。それで気を良くして、卒業後は広告代理店で絵の関係の仕事に就きたいと思っていましたが美術系を出ているわけでもないし、「あなたこんなレベルで仕事しようと思ってるの」「みたいな感じで、結局鼻で笑われて終わり。自分の立ち位置ってそういうところなんだということが分かった。絵の仕事はやっぱり諦めました。

全く違う所に就職したんですが、その後三十回ぐらい転職しましたね。一番短かったのは十五日でした。経営者と喧嘩して。若くてとんがっている頃ですから。飲食もやったり眼鏡店の販売員やハウスメーカーの営業もやりま

寄せ植えの鉢の注文が入ったりすると、観葉植物の名前や水やりの方法などを、ポストカード位の大きさにスケッチしていつも付けていたんですが、それがとても好評でした。そこで眠っていた創作意欲がムクムクと湧いてきた。

間もなく四十歳という時に「ああ、人生の折り返しだな。このまま絵の仕事をしなくて一生を終るんだぞっか」と主人と話しなが飲みに出ると「タロット占いますよ」というお姉さんがいて「いま頭の中で考えている仕事をやれば大成功するカードが出ました」って。それで花屋をやめました。

やめて三か月後、道新から出ている『花新聞』という月二回発行の雑誌創

刊時、私が花に詳しいということを知人が編集長を連れて来たんです。編集長は花のことをあまり知らない方だったので、黒子として動いてほしいという話でした。「構いませんがイラストレーターは要りませんか」と尋ねたら「監修の先生方に植物の知識があるイラストレーターが欲しいって言われているんだけど、そんな人がいなくて」という話だったので「とても私に向いているじゃないですか。それで決まりましたね。それから十年続いています。

四十四歳で出版

花屋で働いていた時から絵本を年に一本位ずつ描いていました。一等賞に

なったら出版してくれるという公募が五、六社あり、そういう出版社だけを狙って応募し続けていたんです。それまで奇をてらった動物ばかり描いていたのをやめて、どうせ落ちるんだから大好きな猫を描こうと思って『ねこがさかなをすきになったわけ』で応募したところ、それが一等賞になって出版デビュー。私は四月四日生まれなので四十四歳の時に何かが起きるとその頃勝手に思い込んでいたんですが、まさにその通りになりました。

二人で

主人の運転でドライブしながらボートと景色を眺めている時にストーリーが浮かぶことが多いですね。頭の中にひっかかったものを主人に話すと「悪くないんじゃない」などと運転しながら合の手を入れてくれるんです。次にどうなれば楽しいかなと、また三十分ぐらい黙って頭の中で考え、その後、浮かんできたことを喋ってみる。頭の中では完璧にできていても口に出してみると辻褄が合わなかったりして「さっきと矛盾するよね」「あ、やっぱり気付いた？」などやりとりをしながら創っていくことがよくあります。去年のホックキョクグマの『にこにこぎゅっ』もそうやってできた絵本です。

絵本の鉄則

絵本には文で語り過ぎてはいけないという鉄則があります。絵本というくらいですから絵が先に来るんですね。

まず絵だけをパラパラと見て何となくストーリーが分かるように創る。文はその補足なので説明してはいけないうし解説もダメ。文が多すぎると子供の想像力が育たないんです。

絵本はとても短い文章と少ない枚数の絵で物語を語るから、子供がいろいろ想像してくれる。「もう一回、もう一回」って子供が言つのは、もう一度確認したいから。だから何回も読んでと言っんです。

読み聞かせは上手に読めばいいんじゃないって、大事なものは親と子が共有する時間を持つこと。それが分からなくなっている親がいます。寝る前などに子供がお母さんやお父さんを独占できる時間があると、ゆったり幸せな気分で見れるじゃないですか。だから読み聞かせが必要なんですよね。

これからも、色んな人が、色んな場面面で読んで心のどこかに小さな想いを残してくれる、そんな絵本を描いていきたいです。

ひだのかな代 ひだのかなよ

一九六〇年宮城県仙台市生まれ 札幌大谷短期大学保育科卒業。〇五年「ねこがさかなをすきになったわけ」で第十五回けんぶち絵本の里大賞ひばからす賞。〇七年「りんごりんごりんごりんご」で第十七回けんぶち絵本の里大賞ひばからす賞。その他の作品でも多数の賞を受賞。講演やテレビ・ラジオ出演のほかFM北海道アナウンサー千葉ひろみさんと全道各地で絵本の読み聞かせ活動も行っている。円山動物園のボランティアガイドでもある。FM北海道 毎週日曜午前8時30分〜55分「にこにこぎゅっ」放送中。

Dilettante 悠々人語録

昨年の「にこにこぎゅっ」に続き、今年「にこにこぎゅっ おとうさんのて」を出版した絵本作家でイラストレーターのひだのかな代さん。「子供のまま大きくなっちゃったから子供の好きなことがよく分かるんですよ」。そんなひだのかな代さんの悠々人語録です。

あうる古今東西

文化譚

時代によって言葉は変わる――

変化する言語



最近のテレビなどを見ると、政治家や官僚諸氏の話の中に、やたらと英単語が混じっているのが目につく。秀才であろう官僚たちは言うまでもないが、議員、政治家も今では二代目、三代目の高学歴に加え、留学経験者も多くなり、英語も口をついて出るようになったのかもしれない。とはいえ、必要もない十分日本語で足りるような言葉まで、英語になるのは、公人の言葉としては聞きづらいものである。

樹元総理の話し方からではなかったかと記憶している。べつに威張ってくれとは言わないが、国民の代表である議員や政治家が、江戸時代の商家の手代のような、へりくだった言葉遣いをするのもないとは思っている。

はてっとりばよい。ヒップホップ文化を形成する、アフリカ系アメリカ人たちの言葉は、単語のみならず文法まで違っているらしい。少々意気だった白人たちが彼らのマネをし始めると、ごく自然に彼らは違った言葉を造りだしてゆくという。

言葉遣いのほかに、発音も時代とともに変化するようだ。当初、若者が発音する「ジョップ」とか「クラブ」などの言葉の語尾が上がることに、少々違和感があったが、いまや相当数の言葉のアクセントが変化してきている。単なる若い世代の流行かと思っていたが、放送局のアナウンサーまでが使うにいたっては、もう流行と片付けるだけでは済まされないようだ。

このことを悪いと言っているのではない。アクセントが変わったと同時に、その言葉自体の意味も変わってきているらしいのだ。

「やばい」などという言葉は、以前なら人前で使えるような言葉ではなかったが、いま普通に近い形容詞で、おもしろいのはそれが、本来の意味とはまったく逆の意味でも使われていることだ。最近の国語クイズ番組などを見ると、流行に関係のない世代でも、まったく違った意味で使っている日本語は多い。

逆に、日本語としては不自然なものも目立つようになった。単語と単語のあいだに、めったやたらに「を」が入ったり、「ご決定」だの「ご議論」などのように、こんなところに「ご」が要るのかと首を傾げたくなることもしばしばである。

さらには、政治家や官僚が「手前ども」と称するに及んでは、そこまで言つかとという気分にはせられる。そもそも、このバカ丁寧な言い回しが始まったのは、かの海部俊

生きている人間が使っている以上言葉も生きている。進化と呼ぶか変化と呼ぶかは微妙なところだが、共に文化であることは間違いない。

BOOK INFORMATION

ちょっと気になる一冊 受書紹介

「ヒートアイランド」
垣根涼介・著

文春文庫
(文藝春秋)
定価七二〇円
(税込)
二〇〇四年六月
発行



渋谷を舞台にストリートギャングアキの両親。一方、放漫経営のあけ雅を率いて「ファイトパーティ」で荒く倒産した銀行が救済されるという不稼ぎをしていた、リーダーのアキと参謀のカオル。一方ヤクザや政治家の裏金を強奪するプロフェッショナル、柿沢と桃井。偶然にも、雅のメンバーが柿沢達の正体を知らずに金を奪つ。当然ながら、柿沢たちからも金を強奪された当のヤクザからも追われる。そこに雅のファイトパーティの利権に目をつけた地回りのヤクザみ、損得ど返しの商売で倒産寸前の

が絡む。結果、金を巡って四つ巴の攻防が繰り広げられ、アツと驚く結末を迎える……というのが粗筋である。奇抜なストーリーはもちろん、主人公のアキだけでなく、カオルそして柿沢と相棒の桃井も魅力的である。この小説はヤクザと泥棒とチンピラまがいの少年達のぶつかり合いの物語である。だが意外に陰湿さは感じない。奇妙なきまじめさというかストイックささえ感じる。

家を手放しても残る借金に苦しむ「サウダージ」までお預けだ。(Y)

北海道の 同人誌

山音文学



堀真が編集人となり七十八号より復刊する。現在の会員は二十二名で、百十五号から編集人も入谷寿一に代わった。

同人雑誌は減少傾向にあり、作風が固定化したといわれている。かつては商業誌に連載されることをめざして裾野を広げようと編集人が営業マンのよつに出版社を回っていた、といわれる文学状況だったという話を先輩会員から聞いたことがあるが、現在はその裾野は狭まったようである。今はある程度の資金があれば、商業誌にも劣らない見栄えのする雑誌を作ることができる。問題は流通である、言ってもなく

「山音文学」は胆振の豊浦町の高原集落、大和の地に一九五四（昭和二十九）年五月、郵便局長宇川渡（筆名、赤木三兵）と、大和小中学校に赴任してきた校長木村楠雄（筆名、木村南生）が、近辺の文学青年らとともに年二回の発行をめざして創刊された。編集人は木村南生、赤木三平、健富義夫と交代したが、実質、会を支えたのは発行人である赤木三平で、それは現在も子息宇川剛也に引き継がれている。赤木三平はガリ版刷りをタイプ印刷するためと、会の運営経費捻出にも、と印刷機を購入し、印刷業を始める。そして、そのころにアイヌ民族の鳩沢佐美夫が作家として誕生したのはよく知られている。

赤木三平が亡くなり、十年の休刊を経て、編集を札幌に移し、堀内興一（筆名、

内部でしか読まれていない。インターネットがあるではないか、といわれているが、方向性が違うだろう。同人誌は、あくまでも文章を磨く場であるということと忘れてはならない。現在の商業誌はマシクリアリズムだったり、漫画キャラだったりとか、いずれブームは消えていくだろう。では同人誌はどうだろうか、いまだ圧倒的にリアルイズムで重視であり、舞台は身辺雑記の日常主体である。幼少期の思い出ばなしであり、言語不確かな若者の恋愛遊戯ごっこであったり、老いと看病介護の問題に終始している。ときに、老いはあくまでも絶望的であり、文休も嘆息的で読むに耐えられない。しかし、しかしである。ここに、なにか一つでも新しい価値観や認識が書かれていけば、もはや立派に同人誌から巣立っていける。道内にも同人誌出身の

作家はたくさんいる。一方で「同人誌は老人誌」と揶揄されているが、同人誌といってもそれぞれ別のジャンルが存在し、乖離はまだまだ覆いたいものがある。ことばを、つたえたいものがたりを、きちんと届かせるには同人誌が同人誌の役目であり、そうあり続けていたい。「山音文学」の創刊者はそれをきつと望んでいることだろう。

（山音文学 入谷寿一）

鉤素



を使うことにより、針や仕掛けが海底の岩などに引っ掛かったときは、強く引くと鉤素が切れ道糸を救う役目もある。

岡山市に住む浜野博博人は、高校時代の体育祭で首の骨を折る事故に遭い重度障害者でありながら文学に力を傾注し、「去るべきとき」一九八三（昭和五十八）年みずち書房、「遺すものは」一九九八（平成十）年こち書房やエッセイ集等の多数の著作を刊行している作家である。本会の代表である札幌市の草野ゆき子

同人は一九七八（昭和五十三）年「踏みしだく冬」で北海道新聞文学賞の佳作を受賞し、二〇〇六（平成十八）年「鉤素」十二号掲載の「海峡まで」で北海道新聞文学賞を受賞した。

同じく札幌市の樋口今日子同人は、現在日本各地で訴訟となっている肝炎訴訟の先駆けになったルポルタージュ「ドキュメント肝炎」を一九八四（昭和五十九）年に大月書店から刊行している。

北広島市の広中真林同人は新しい加入者でこれからの書き手である。

同じく北広島市の住人である筆者は、四十年に及ぶ長い同人誌等の経歴がありながら、札幌、小樽、釧路、紋別、根室、留萌、函館各市の文学仲間と、各地の美しい魚で旨い酒にうつつを抜き、自他共に認める代表作はまだない。

はりす同人会はこれまでのところ積極的に新しい同人を迎えていないのが実情である。

（はりす同人会 中本俊生）

■編集部から 「地球上の多様な生物をその生息環境とともに保全すること。10月名古屋で行われたCOP10の目的です。『遺伝子への利益配分』が新聞を賑わしていましたが、『絶滅危惧生物3割超す』にも注目したい。絶滅が危惧されている貴重な生き物にホッキョクグマやオランウータンなどが含まれている。小誌で紹介したひだのかな代さんは絵本『にこにこぎゅっシリーズ』でホッキョクグマとオランウータンを通して家族愛を描いています。子どもたちに「動植物の環境を守り、人間との共存の大切さ」を伝えていきたい。（K）



●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL: <http://owl-online.jp>
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
●発行責任者／林下英二
●発行日／2010年11月11日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス！